

CLAIRS活動報告

関西大学チアーディングサークル「クレアーズ」

現在、私たちCLAIRSは三回生2名、二回生5名、一回生9名の計16名で活動しています。新年度に入ると同時に四回生から引き継ぎ三回生が代表となり、サークルを運営していくこととなりました。「上に立つ」ということがどれほど大変でどれほど苦悩するのかということを、四回生が卒部されて初めて知ることとなりました。春休みが明け、チームのメンバーは6名という少数でした。そこで、CLAIRSを救ってくれたのが、今年度新たにチームに加わった一回生9名と二回生1名です。人数が増えまだ課題やぶつかり合うこともあります、この活気づいたCLAIRSによりいっそう楽しく、和気あいあいと練習に励んでいます。

昨年度は、数多くのイベントや長柄会総会、校友会各支部総会に出演させていただき幅広く活動させていただきました。

校友会支部総会においては先輩方からの応援のお声をたくさんいただき、本当に温かく迎えてくださいました。先輩方の応援を胸にこれからも精進していきたいと思います。また、長柄会の先輩方にはいつもご支援や応援のお声をいただき、本当にたくさんのご指導をいただいています。そのお声に対してどのように答えていくことが出来るのか、悩んだときもありました。私たちはただ自分たちのやりたいように、自由に活動しているだけいいのか。長柄会の先輩方のご期待にこたえるためには、今後も新しい方面への活動を広げ、まずは私たち



マイ ブーム
My Boom
生駒山、高安山、信貴山、金剛山、葛城山、山の辺の道など気楽に行く事の出来る登山やウォーキングに出かける事が楽しみになっています。

八尾の自宅のすぐ東には高安山の気象レーダーが白い球体を輝かせています。タオルとお茶、おにぎりなどと共にリュックを抱ぎ出かけます。1時間も歩くと水飲み地蔵に到着します。ここからは大阪平野が一望できます。春には桜、しばらくしてツツジやアジサイなど季節の花が美しくその景色にストレスも解消され、とてもすがすがしい気持ちになります。自然はいつでも人々を癒してくれます。

しかし冬の金剛山ではとても怖い思いをしました。お正月休みに以前から行こうと思っていた金剛山へ向かったのです。金剛山は冬の耐寒登山として学生などもよく登る山です。その事が私に危機感を少なくしたのでしょうか、あんなにも雪に覆われているとは考えもしませんでした。

近頃の中高年の登山ブーム。よくニュースで

の名前を知らうことから始めなければなりません。それがCLAIRSの位置づけをはっきりさせることに繋がるのだと思います。

私たちは「公認サークル」であり「チアリーダー」です。その立場をしっかりと自覚をして、今年度は長柄会の先輩方とのますますの交流と活動の幅を広げていけるように努力しています。

今後の活動としましては、毎年度お声かけをいただいている「吹田市敬老会」や「関西大学学園祭」、「校友会各支部総会」に加えて、昨年度からお声かけをいただいているクリスマスシーズンの「西部一倉社長会」や「大阪マラソン」の応援、その他2013年のイベントのご依頼もいただいています。各イベントに向けて、日々の練習により一層力を注いでいきたいと思います。

まだ未熟で至らない点も多々あるかと思いますがCLAIRS一同、今後のチームの発展を目指し精進していきますので今後ともご指導の程、よろしくお願い致します。

今年度に入ってからはスプリングフェスティバル、支部総会、吹田祭りなどの毎年度出演をさせていただいているイベントに加えて、日本庭園での演舞やライオンズマンションの夏祭りなど、今年度新しくご依頼をいただいたイベントにも出演させていただきました。そこでも「来年も」というお声をいただくことができ大嬉しく思います。

また吹田祭りでは、観客の皆様に楽しんでいただきなおかつ私たち自身も楽しもう、という意気込みをもって本番に挑みました。その結果として、昨年と同様の笑顔賞をいただくことができたことをチアリーダーとして誇らしく思います。

さらに今年度は新たに、アメリカンフットボ

ルの試合の応援に挑戦することとなりました。サークルの応援ではありますが、春期、秋期ともにさまざまなチームと対戦されます。私たちの応援が少しでも選手の方たちの力になれるように、声を張り上げた力強い応援をしていきたいと思います。

今後の活動としましては、毎年度お声かけをいただいている「吹田市敬老会」や「関西大学学園祭」、「校友会各支部総会」に加えて、昨年度からお声かけをいただいているクリスマスシーズンの「西部一倉社長会」や「大阪マラソン」の応援、その他2013年のイベントのご依頼もいただいています。各イベントに向けて、日々の練習により一層力を注いでいきたいと思います。

まだ未熟で至らない点も多々あるかと思いますがCLAIRS一同、今後のチームの発展を目指し精進していきますので今後ともご指導の程、よろしくお願い致します。

CLAIRS代表 奥村 菜摘



【前列右から】
山内 真衣(2)、南 映里(3)、奥村 菜摘(3)、沼田 栗奈(2)、
高坂 依世(2)、矢野 由子(2)
【後列右から】
大友 有里(1)、大石 唯乃(1)、満尻 真奈(1)、林 さくら(1)、
神澤 瑞架子(1)、葛野 和歌(1)、釜田 菜穂(2)、萩本 千珠(1)
【写真不在】
小見山 美穂(1)、塚本 真衣(1)

ウォーキング

遭難者が出てると報じています。その原因といえれば軽い気持ちで出かけた結果の準備不足の軽装備などです。私の場合もまさにそれでした。冬の山に一番に準備するはずのアイゼン(靴に付ける滑り止め)を持たずに出かけたのです。今から思えば本当に無謀です。登るにつれ雪が氷に変わりアイスバーンになっています。上に行くもの、下に下りるものその一歩一歩が命がけです。それでも周りには何人かの登山者が居ます。その人達に助けを求める訳にもいかず平静を装い、何とか登って何とか下りて命がけの冬登山を無事に終えたのです。

それから冬山には行っていません。夏山も暑くて無理です。気候の良い3月頃から5月のゴールデンウィークあたりまで、天気と体調の良い時に妻を誘って気軽にウォーキング程度に楽しんでいます。

優しい自然の中で気持ちを解放させてくれる料金いらずのウォーキング。これから10年後、20年後もマイブームであるように細く長く続けたいと思っています。

優しい自然の中で気持ちを解放させてくれる料金いらずのウォーキング。これから10年

後、20年後もマイブームであるように細く長く

続けたいと思っています。

優

長柄会の皆様の熱意に感謝

関西大学校友会 会長 寺内 俊太郎



関西大学応援団OB長柄会の第69回総会を迎えて、誠におめでとうございます。

毎年、厳粛な総会後の懇親会では、ご家族も参加されてのアットホームな雰囲気の中、応援団ならではの楽しい進行で、吹奏楽演奏・現役チアダンスの数々は年代を超えた本当に心温まる会と特筆すべきものであると存じます。

特に応援団初期の頃は、現代より集団をまとめ上げる器量や人望、時には力が求められ、豪胆でありながらも荒くれの気質が強い人間が求められる組織・気風で、慣習やしきたり、また上下関係が非常に厳しい組織であったと思われる貴會にあって、和気藹々の組織として見事に過去を乗り越え、母校愛に強く、熱く燃える方々ばかりで、校友団として誠に好ましい限りであります。

「紫紺の応援団旗はためくところ常に

関大生あり」と伝えられているように、各地の球場、競技場、スポーツ施設に大旗は翻り、スタンドの学友による声援と拍手と合わせ、「質実剛健」に燃えた皆さんは、本学選手の士気を大いに鼓舞し、関大生としての連帯感を更に濃くして愛校心は自然に育まれてきたものです。

そして学生時代に培われたリーダーシップは、卒業後の社会人生活において、組織内外での対人折衝や物事の運び方に際し、ごく自然に發揮され更に発展されて来られた事と存じ、それは各界でご活躍の皆様のお姿から強く伝わって来るものであります。これは、単に体育会関係の応援に留まらず、第二部校友会の単独パートとしての応援団が文化会本部、学術研究会本部や他の単独パート傘下の各クラブを含む全ての関大生の応援団であり続けたからだと確信致します。

皆様の根底には、「常に愛校の精神に徹し、本学建学の趣旨に基づき挙学一致

第25代 青山吾郎氏追悼寄稿

天六学舎を死守した大将

青山吾郎。関西大学二部応援団第25代団長の死は壮絶であったがその顔は安らかであった。副団長・総務部長は棺(ひつぎ)に団長を納めた。涙をこらえる事が出来なかった。共に青春を駆け抜けた友を支えること、心から思いやることの出来なかった悔悟・痛恨の涙であった。

1966年春4月。青山吾郎は、肩荷利勝・松本安吉・多和田功・平田和男・出口健一・田中俊夫と共に関西大学二部応援団の丈夫となつた。

一番幼くてやんちゃ坊主の吾郎ちゃんが1968年の晩秋、天六学舎の大将たる応援団の団長となつた。時、あたかも70年安保前夜で大学紛争が頂点に達し、一部千里山学舎は全共闘に占拠され、2部天六学舎にも全共闘が押し寄せ、中庭で集会を繰り返すなど天六学舎も何時占拠されても不思議ではない状態であった。

大学当局は2部学舎の占拠を恐れ、千里山大学本部占拠の二の舞を防ぐと事務室から重要文書を運び出し、機動隊の警備を当てにしてロックアウトを目論んでいた。天六学舎は2部学生にとって

はまさに「狭いながらも楽しい我が家」であり、「昼夜働き、夜学ぶ者」ととっての拠り所、学生の証明でもあった。占拠・ロックアウトは千里山学舎とは違い、2部学生にとっては死をも意味する非常事態であり、学生としての活動の全てを失うことに他ならなかつた。天六の大将は「大學が見捨てるなら、我々学生が死守する。」と逆封鎖を決意した。

今思えば馬鹿げた話かもしれないが、その時は命を捨てる覚悟であった。階段に机を積み上げて最上階で立て籠もることにした。階下から火をつけられることも想像した。

結果的には、2~3日で逆封鎖は幕を降ろしたが、大学当局に天六学舎を何としても守らねばの思いを植えつけることになった。一時的にロックアウトはされたものの、その後天六学舎は、学内でのセクタ間の争いは激烈を極めたが、封鎖されたりセクトにアジト化されることも無く、千里山移転までその使命を全うし続いた。

幸せであったとはいえない後半生。大将は必死にもがいていた。大将であったことの誇りを胸に生き続けた。大将と太い絆で結ばれていたはずの同期が、強い絆で支えてやれなかつた無念さ。惜別の思いは消えることはない。

意味を持った事実を忘れてはならない。この時、天六学舎の大将が青山吾郎でなかつたら、今の関西大学は無かったかもしれない。その本当の意味を知っているものは数少ないだろう。

大将の死守した天六学舎は、その果たした役割など一顧だにされることも無く、千里山移転でその使命を閉じ、2部も廃止され、2部応援団も消滅してしまつた。それでも大将は2部応援団の復活を夢見て、OB会活動、校友会活動に全靈を注いだ。

幸せであったとはいえない後半生。大将は必死にもがいていた。大将であったことの誇りを胸に生き続けた。大将と太い絆で結ばれていたはずの同期が、強い絆で支えてやれなかつた無念さ。惜別の思いは消えることはない。

第25代 田中 俊夫



1969年夏合宿 JR浜坂駅前で学歌を指揮する青山吾郎

天六学舎は正常化に向けても大きな

トにも通じるものを感じるのは私だけだろうか。チーム(Team)の語源は聞く所によるとTogether(一緒に)、Everyone(皆さん)で、Achieve(成し遂げる)、Miracle(奇跡を)の頭文字を取ったものだという。応援団の綱領にも「戮力(りきり)」といふ言葉がある。戮力(力を合わせて)精進(一心不乱に取り組む)事によって負荷の大任を全うせん事を期す。事を我々は代々指針として活動してきた。現役時代にどれだけしんどい思いをしても、今は良い思い出として語る事が出来たり、年代が親子やそれ以上に離れていても、応援団のため、関大のために一つの旗の下に集まる事が出来るのはその精神と、現役中に培われた絆ゆえではないかと思う。



関西から段々離れて行く事になり、なかなかOBにも顔を出せない状況になってしまってはいるが、今回の合宿を通じてOB総会はもちろんの事、こういった機会には今後ともぜひ参加したいと強く思うようになった。最後に、今回この合宿を企画して下さった先輩方と若輩である私に執筆を薦めて下さった上符先輩に深謝し、筆を置きたいと思う。ごつづんでいた!

第50代 山村 浩一

「OB合宿と称して」に参加して

和邇駅(わにえき)JR西日本湖西線、滋賀県大津市)を降り日出美荘までの道すがら、現役時代の和邇駅から千鳥荘への道程を思い返していた。団旗を担ぎながら、または幹部のサブに付きながら…。その時の風景と同じ様な違う景色が約20年の年月を感じさせた。合宿という名称だった事もあり、集合時間に全員が集まると思いつや、其々の事情もあり徐々に集合(ここら辺がOBゆえの趣か(^v^))、大団旗の到着も交通事情により屋前にならうなので、昼食のアルコールで身を清めてから(笑)という事になった。昼頃に通勤先輩の車で大団旗が到着して身を清めた後、大阪から自転車でやって来る為に到着が夕刻になると、今度は合宿で最下級生の横山君に代わって私が揚げる事になった。

現役時代、鼓手だった私は練習でも団旗を数回しか揚げた事が無い。OBになってからは合宿などで数回持った事が有ったが、久々に揚げた団旗は年齢も手伝って今まで重く感じられた。記念撮影後団旗は支柱に固定して虫干し、ここ数年揚げていなかったので状態が不安であったが、大きな汚れもシミもなく、全員が胸をなでおろしていた。

その後OBバンドのメンバーは湖畔で各自が楽器の練習、リーダー部も石原先輩を中心に、私の同期の山崎(旧姓平野)の愛息の太一郎君と共に

OBバンド活動報告

別としてもあまりにも少なすぎる。練習も各パート毎の練習、あるいは個人練習が中心となり、練習曲の通し練習も不足パートが多く練習にならない。そのため総会での演奏曲目選定にも支障が出ている。今後のOBバンドの活動方法や編成などをあれこれ考えても結局はメンバーが少ないので結論が出てこない。このままでは活動中止という事態も生じるのではと不安になる。

そこで、40代、50代に吹奏OBがかなりいるの

で、彼等、彼女等の参加をお願いしたい。君達の力

が今後のOBバンド継続には是非とも必要である。また親衛隊やリーダーのOBで楽器をやりたいという者も大歓迎で、第二、第三の横山君や馬渕君の出現を大いに期待している。

2部応援団OBとは言え社会人としては現役であり、練習参加も儘ならないとは思うが、OBバンドが長柄会の一部門として存続して行けるよう、諸君の協力をお願いする。

第25代 出口 健一

「居酒屋でのホームルーム」があるからです。
こんな不心得者でもOBバンドは大歓迎してくれます。

第28代 馬渕 純一

現役時代の思い出 あれから40年

大阪から応援団の友4人の訪問を広島県府中市で受けました。久し振りに木朴先輩(22代)、末永・上符(24代)、松本(25代)の元気な姿を見る事ができ、とても嬉しいと思いました。

20年くらい前、総会で2、3度会ったぐらいでその後会っていましたので、その変貌振りには驚かされました。皆さんそれぞれ醜い形の体になつておられました。

橋高先輩(23代)と共に先輩の弟さんが経営されている料理屋で瀬戸内海のビーチビーチの魚を頂きながら40年前のはじけた応援団生活の今だから言える話、そんなことあったの話・現在の団員近況の話に花が咲きました。

翌日はNHKの大河ドラマ「平清盛」ゆかりの宮島に参拝しました。どうしたことか台風で銅板の屋根が壊されたため修理中で、大鳥居は見られませんでした。宮島は島全体が島峰なので島民の墓を作ることができず、対岸の町においてあるそうです。参拝の後10分ぐらい歩いて真言宗のお寺へ行き、そこで懺悔し身を清めて大阪へ帰つて行かれました。

40年前は田中角栄総理の日本列島改造で世間の景気は良く、労働者も夢を持って働いていま

した。菊池(24代)に初めて連れて行つてもらつたスナックでは、由紀さおりの「夜明けのスキャット」、パチコ屋では城卓也の「骨まで愛して」、バーフ佐竹の「ネオン川」などが流れ、給料は少ないのでそれなりに楽しく、希望を持っていました。今、書きながら40年前の記憶がだんだんと戻つてきました。天王寺の寿司屋でトロをバババ食べ、通天閣の下では河豚刺しでビールを飲み、焼肉屋ではホルモンの煙で酒を飲み、当時一般の人が余り食べてなかつたのか、とにかく安かつた民間の会社に勤めている人はこれから伸びるだろうと思う会社に転職し、公務員の人は大卒の資格を取るべく関西大学2部に通つていました。私の周りには公務員で退職した人が多くいます。当時、会社の景気は右肩上がりで、私は公務員の給料の倍をもらつていました。しかし15年でその状況は逆転してしまつました。時代の流れは刻々と変わります。今の大學生は長期不況の中で就職活動が大変です。生活が保障されている終身雇用の公務員が人気です。構造改革を掲げて小泉政権が発足した2001年前後は会社にしがみつくのは凡庸な生き方でダメという空気がまだありました。定年まで勤めたい、なんて「僕は凡人です」と答える

のと同じだったので言い出しにくつたので、しかしその後10年でグローバル化が進み、激しい自由競争にさらされると「凡人」でいたら正社員どころか一生フリーターかもしれないとなおびえ始めました。平凡だったはずの終身雇用は特權となり、しかみつけるだけしがみつこうと考えようになっています。若手に強まる終身雇用願望はないものねだりで、今、企業の寿命は30、40年と言われています。定年まで会社が存続している確率は非常に低いと思います。世界トップを走っている企業もいつまでも安泰とは限らなくなっています。テレビを作り過ぎて7000億円の大赤字のパナソニック、40年前には想像すらできなかつた事でしょう。大変な時代になつてきました。

「あれから40年」のタイトルは漫談家の稟小路みまろから頂きました。

あれから40年経つ幸せな顔をした皆さんの写真を添えます。

第24代 背尾 芳徳

